

新刊 紹介

"I love my books as drinkers
love their wine; The more I
drink, the more they seem
divine."

同志社女子部編「同志社創立九十周年記念誌」京都・同志社同窓会、A5判二二六頁、非売。

創立九十周年の諸行事を終り、百周年への道をふみ出すにあたり、女子大学、女子中高、同窓会の三者がいっしょになって記念誌を出したということは実に意義深い。とはいえ、企画、編集の主体は何といつても同窓会であり、二百余頁にもおよぶものをこれだけにまとめられたことは敬服する。内容は総長、理事長をはじめ、各長の感想につづき、回顧、現況、同窓会小史という順に編集されているが、おもしろさの点で

は回顧の中にある旧師、同窓生の随想が第一であろう。武間会長自身が資料を整理され、まとめられた同窓会小史、年譜記録は古い写真とともに大いに参考になる。先日ある会合で女子部バザー是非論が出た時、「記念誌の中のバザーの起原のところ読まはりましたかいな」という発言があったが、誠にこれは必読の箇所ではある。

随想をよせられた人々が実に気楽に言いたいことを言っておられるのは他に見られぬことで、しかもその中において、現在の同志社教育に期待し将来を頼んでおられるのは妙に一樣であり、読む人すべてが「人類の平和と幸福」のために「よい同志社っ子」になりなさいと息を吹きかけられる気がする。

これは男子校友の方々にも、女子大学、女子中高の現況を理解してもらおうのに恰好の書であり、必読をおすすめしたい。(中島) 江上康・前芝茂人著「緑の秘境・白い巨人」東京・講談社、新書判二五三頁、定価二八〇円。

本書はすでにご存知の通り、同志社山岳会が、同志社創立九十周年事業の一つとし

て、ペルーアンデス・アマゾン登山・探検隊を派遣した時の遠征記である。

アンデスの巨峰サルカンタイ(六三〇〇メートル)登頂とアマゾンの源流を下るといふ、まことによくばった、そして面白い、突飛な思いつきは隊員の平均二十六歳という若さから生れたのかもしれない。

隊員の大部分は職を捨てて参加したという。一般に現代の青年は夢と勇気をもたなすぎるのではないだろうか。海外へ出る人が多くなつたもののまだまだ夢も勇気ももたず、ただなんとなく毎日を過ごしているものも多い。若い間に一度は自分の夢を実現さすべきではなからうか。

この隊員たちが遠征するにあたり、それぞれ現実にむづかしいことがあったと思われるが、これをまっしぐらになしとげた、ということに拍手を送りたい。

サルカンタイ峰登頂の苦闘を物語る頁は、過去のヒマラヤのアビ峰、同じくサイパル峰、などのかがやかしい業績と共に高く評価されるものである。

また、インカ帝国の遺跡など、この土地の歴史的な背景による各種族の気質、風俗、

習慣などが隊員の生活と共に折り込まれて
いる。アマゾン下りにおいては、土人の毒
矢や、吹矢、首狩族、またワニ、大蛇など、
一般に想像するところであるが、そこを特
製のゴムボートで激流を下るところは若い
冒険心をそそる。

月旅行ももう遠くないこの世に、まだ原
始生活を送っている彼らの生活は、スモッ
グの中に文明に押されて生活しているわれ
われよりも、住みよいかもしれない。興味
深いところである。(川村)

山路愛山著「基督教評論・日本人民史」東
京・岩波書店、文庫判三八二ページ、二
〇〇円。

明治のすぐれたジャーナリスト、愛山・
山路弥吉の「現代日本教会史論」、「耶蘇伝
管見」、「日本人民史」が収録されている。
愛山はメソジスト教会の牧師や同教会の
機関紙『護教』の編集もした人であるが、
徳富蘇峯に私淑し、そのためか同志社に對
する関心も強かったようである。「現代日
本教会史論」のなかで、新島襄の同志社大
学設立運動はキリスト教徒にとって最も大
胆な計画である、それは官学と早稲田、慶

応にとって天下三分されている形勢のなか
で開始されたからである、とのべている。
しかしナショナルリストとしての批判の言葉
もそこに記されている。「同志社大学の企
図善しと雖も、同志社にして外国宣教師の
勢力範圍たる内は是れ亦真個の独立自由を
有する学校にはあらざるなり」。結論とし
て、将来の教会はいかにあるべきかに触
れ、日本人自らの研究による新神学を基礎
とした日本人自己の教会を、と要望してい
るのは興味ぶかい。

「耶蘇伝管見」は夢に古代のイスラエルに
遊び、イエスのことを見聞するという物語
風の叙述である。歴史先生という解説者と
の問答のなかに、愛山のイエス観がのべら
れているが、当時の聖書の歴史研究の結果
がよく採用されており、今日の保守的なイ
エス伝より進歩的といえよう。

「日本人民史」は愛山がライフワークと考
えたものであるが、第四十講で永遠の未完
になった。活字になったのはこの文庫が最
初ということである。古事記や日本書紀を
神話として批判的にあつかい、日本人の伝
来をアイヌや東南アジアとの関係で論じ、

朝鮮語と日本語の類似を調べ、天皇家の由
来なども歴史的に研究しようとしているの
には、時代が時代だけにおどろかされる。
方法論は唯物史観ではなく、むしろ民俗学
であるが、たとえ完成していても、とても戦
前には出版できなかったとおもわれる「人
民の歴史」である。(笠原)

東京・三彩社、八六〇円。

イコンはラテン語で聖画像の意味であ
る。六世紀ころからキリスト教徒たちの間
で深い感動の源泉として礼拝された。イコ
ンは神が直接あらわれる窓として各家庭に
おかれ、信仰の大きなよりどころであった。
近年になってイコンの価値はますます高く
なり、神と人間の交感の徴(しるし)とし
て、芸術作品以上の重要性をもつようにな
ってきた。キリスト教を知るためにもイコ
ン発生の歴史から技法までを解説したこの
書は、イコン入門の絶好の手引きとなるも
のである。美しい原色版、豊富な図版によ
って宗教的な感動とともに、その芸術の輝
きをあわせて鑑賞できる

(京都新聞 4月27日付)